

檀一雄「此家の性格」論

長野, 秀樹
九州大学大学院 (修士課程)

<https://doi.org/10.15017/11985>

出版情報 : 語文研究. 61, pp.40-48, 1986-06-03. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

檀一雄「此家の性格」論

長野秀樹

檀一雄の第一短編集『花筐』は昭和十二年七月、赤塚書房より刊行された。文壇へのデビュー作である「此家の性格」（「新人」昭和八年十一月創刊号）から表題作となった「花筐」（「文芸春秋」昭和十一年五月号）までの作品八編を収める短編集である。装幀は佐藤春夫。太宰治の言を容れ、表紙には蝶が描かれている。

巻頭に置かれるのは「此家の性格」であるが、その執筆の動機について檀は次のように回想している。^注

丁度その頃のことである。風変りな勧誘を受けた。小説を書いて見ないかというのである。私に小説などというものが、一体出来得るか？

なるほど小説というものなら、多少読んだことがある。メリメとか、ドストエフスキーとか、その時々々に読んで、その時々々の不思議なドキドキするメマイのようなものを感じはした。

いや、ハッキリいってしまうなら、瀧井孝作という人の『父の活計』という作品を読んで、何というか、剛腹な肉感を文章に置換するその肉体鍛冶の方式とでもいったものに悟入したと信じたことがある。〈中略〉

私は立花伯爵邸の図書館に、半分昼寝、半分納涼に出向く習慣であったところ、誰も閲覧客のいないその閑寂な図書館の中で、キジャキジャと啼くカササギの声を聞いているうちに、ふと、どうでもいい、己のこの奇ッ怪な憤怒と孤独を、おがみうちに叩きつけてやれという不思議な気持が湧いた。

このように檀は、作品を書く直接の契機となったのは、瀧井の「父の活計」を読んだことであり、同作品に「剛腹な肉感を文章に置換するその肉体鍛冶の方式」を学び、「己のこの奇ッ怪な憤怒と孤独を、おがみうちに叩きつけ」るようにして書いたのが「此家の性格」だといっているのである。檀自身このように解説しているのであるが、その内実は必ずしも分明ではない。「剛腹な肉感」といい、「肉体鍛冶」といいながらも、具体的にそれらが何を指すかは示されていないし、「奇ッ怪な憤怒と孤独」といいながらも、それ以上の説明はなされていない。そしてこの「肉感」といい「憤怒」といい「孤独」という言葉は檀の文学論の中に屢々登場する言葉でもある。^注

檀の文学的出発にあたってのそれらの言葉の内実を明らかにしてみたいと思う。

瀧井孝作の「父の活計」は「改造」の昭和五年三月号に掲載された作品で、内容は主人公である「私」が指物師である父と「私」の半生を回想したものである。

「私」の一家は名人気質の父の特許出願癖や相場の失敗等で逼迫する。「私」は進学を諦らめ魚屋に奉公に出る。そういう経済的に追いつめられた生活の中で、母、兄、祖父、祖母と家族が次々と亡くなってゆく、やがて生活にやや余裕のできた父は後妻を迎えるが、その後妻も去ってゆく。それでも父は生活を持ち直し、大阪まで、また新案特許を売りに来る。父はもう七十を越え、「私」は別に家庭を持つており、そこからそういう父の半生を回想しているのである。簡単に粗筋を述べたが、恐らくは主人公である「私」は瀧井孝作に比してよく、また、指物師でもある父も瀧井の作品によく登場する瀧井の実父であると考えてよいだろう。

では、こうした「父の活計」のどこに檀は強い影響を受けたのだろうか。「此家の性格」と「父の活計」の両作品に最も特徴的なことは、それが共に父を中心とする家庭内の物語として設定されているということであろう。「此家の性格」は、「永い不行跡の後で行衛を失うていた父が北海道からひょいと戻って来た」ところから始まる。母は父の留守中に旅役者と関係を持つており、「親達のそういうねじれた雰囲気の中で」主人公は「卑屈に育っていき、母の自殺。父の再婚。主人公一俊の結婚。長女の誕生。それらの出来事が父との対立の下で、過ぎていき、長女が病死したのを契機として、主人公一俊が家を出ていくまでの物語が、「此家の性格」である。では、何故、檀は家庭内の物語であるということにこだわらねばならなかったのか。その鍵は、恐らく檀が生育した家庭環境に求められる。

檀の母親とみ（後に再婚して高岩とみ）が若い医学生との恋愛をきっかけとして家庭から出走するのが大正十年檀一雄九歳の折である。それ以前から母が再婚であることを父に知らせていなかったことが遠因となり、両親の間に諍いは絶えず、また、父の転勤等の為、祖父母の下に預けられることも多く、檀が家庭的には不遇な少年時代を過したであろうことは想像に難くない。

たとえば「父の活計」では、実母の死後三人の継母が次々にやってくるが、檀の幼少期にも同じような事があったらしい。自筆年譜によれば、大正十二年十一歳の項に、「父が正式の離婚をせぬため、後添いの母は来ず、隠し妻を送迎す」とある。また、「私は今日まで都合四人の母を持つている。或いは持つてきたと云うべきかもわからない。私が「お母さん」と明瞭に発声したのはそのうち三人だけであって、一人の母はまだ「お母さん」と呼び得る状態に達する前に、私の家から、いなくなった。」とも回想している。更に高岩とみの回想記である『火宅の母の記』（新潮）昭和五十二年十月号、後に加筆して五十三年九月新潮社より刊行）には、昭和八年夏、十二年ぶりに再会した後、檀が次のようなことを語ったとある。

父親と二人暮らすようになった十歳の一雄に、毎日、私のことを父親が言わない日はなかったこと。中学二年のある日、試験を前に勉強している一雄に、「お前のお母さんは、人の面をかぶった鬼だ。淫婦だ」と、いつものように父親が罵り始めたので、たまりかねて「やめてください。これ以上、お母さんの悪口を言うなら、ぼくもこの家を出ていきます」と初めて言ったこと。そして、父親がいつ、どうやって私をいじめた、ということ覚えていた限り並べたところ、それ以来一切、私のこと

は言わなくなった、など、つらかったはずの日々の話を、明るい語調で冗談をまじえながら語ってくれました。

この回想からも、母親出奔後の檀の家庭の状況はよくわかるであろう。また当時父親は神経衰弱気味であったらしく、同書には父親の次のような発言も記されている。

「谷村や足利で、あなた（檀の母親——引用者注）にあのようにつらく当たりましたのは、私はあの当時、体を悪くしていたものですから、お気の毒なことをしてしまいました。柳川に帰って、よく調べてもらいましたところ、十二指腸虫が沢山わいており、体が弱っておったのです。それで、神経もまいってしまつて、あんなことをしてしまいました……」

このように檀は母の出奔の後、神経衰弱気味の父親と、妹たちと、暗い家庭生活を送っていたのであろう。

ところが、こうした足利の生活を檀自身は次のように回想している。^{注6}

殊更、私が数え年十歳の折に私の父母が離別して……、と云うより、生母が足利の家から出奔して私は三人の妹を抱えながら、病弱の父と暮したから、足利の七年半はとりわけ印象の深い一時期として思い出される。九州の片田舎の小学校から足利の小学校に転校して来た時の驚きと云うか変化と云うかは、今日ではもう想像もつかないだろう。ひょっとしたら、言語、人情、風俗の相違は、今の中国大陸と日本ぐらゐの違ひがあつたかも知れない。

△中略▽

私はこの寺（長林寺という曹洞宗の大きな寺——引用者注）

に移り住んでから、云ってみれば、一個の神仙であつたと答えていかもわからない。私の母はこの寺に転居して間もなく子供四人をおいて出奔し、そのまま永久に帰って来なかつたら、私はその後の大半の生活をここで自炊して暮している。

殊に妹達が九州に預けられてからは、一人、夜昼の区別もなく両崖山の尾根を走り歩いたものだ。

後年、檀が料理に異常なまでの執着をみせる基礎は、この時期に作られたと私は思うが、それはさておき、この引用部分の後には、更に足利の自然の中で、「頬白、目白、四十雀の類」を捕り、「楓の液汁をすわぶ」といった「一個の神仙」の思い出が語られる。足利時代を「とりわけ印象の強い一時期」と云いながらも、母が出奔した後の父との葛藤は一言も語られず、家庭を離れて、自然の中で遊ぶ「神仙」の思い出のみが語られるのは何故であらうか。

恐らく、先に母に語つたという父の事件も本当であらうし、この「神仙」としての檀の姿もまた本当なのであろう。つまり、檀はこの時期、家庭の暗黒面から早く逃避した結果、家庭を離れ自然の中にはいつていったのではないだろうか。病弱な父と、自分達を置いて出奔した母。そして、そういう母を罵る父。また、父の隠し妻。少年にとって重たすぎるそういう現実からの逃避として、檀は「一個の神仙」として、家庭を離れて山野を歩き、鳥を捕る自然児とならざるを得なかつた。そう推測しても許されるだろう。また、別の作品の中で、檀は「父は母の出奔を知って驚いたに相違ないが、出奔直後の父の反応を一つも記憶していない」と述べているが、これも意図的であるなしかかわらず、逃避行動の一つとして、記憶の抹消が行われた結果であると考えていかもしれない。

とまれ、こうした少年時代を過ごした檀が、「父の活計」を読んだ時、その語られる内容に、まず、身につまされたと考えられることも許されるのではないだろうか。これがまず、檀が、瀧井の「父の活計」に感動した第一の要素であろう。

だが、両作品を作品の内側から検討するとその違いの大ききさにも気づかされる。それは「父の活計」が、所謂心境小説としての安定と調和の構図を示しているのに対し、「此家の性格」には、それが全く見られないということである。先にも述べたように「父の活計」に描かれた家庭は、経済的にも困窮していたし、また、家族も次々と死んでいった。しかし、それらは全て主人公である「私」の回想の中の出来事であり、作品の最後で大阪へ出てくるという父を待ちながら「私」は次のような感慨にふける。

父が彼岸頃出てくるにちがいないから、私は待つやうな気持ちでいろいろ父のこれまでの生活を思ひ出した。

私は活計の困しさから女房に逃げられないかとあんじるやうな日もあったりして、こんな作家生活と、名人かたぎみたいな指物師と、二人が似てゐて可笑む位だった。父子の親愛は別にしても、この似た点で近い感じがされた。困しかった父のことも、思ひ描いてゐたら私自身を描いてゐるかに思はれたりした。そしていま父が七十何才まで生きて来たこと此生活の根本は、有難い光明に見えた。

つまり、主人公である「私」の視点は、父との確執や家庭内の悲劇を過去のものとして捉えているといえよう。父も生活を持ち直し、「私」も、また、作家として妻と子を養い、安定した生活を営んでいる。その視点から父の半生を回想しているのであり、そこに△安

定と調和√は生まれている。

これに対して「此家の性格」も主人公である槍一俊が一人称である「僕」で示され、父親との対立から家を出るまでが過去形で述べられるという形式をとっているが、過去を回想している「僕」の姿は示されない。作品は「自分は薄れた光の中に覗き込むようにみつめていくフジ（一俊の妻——引用者注）が、夕闇の遙か向うに遠ざかるのを眺めながら、遠い旅の行手に暗喑と心を曇らせるのであった」という末部で閉じられる。父との葛藤は解決した過去の物語として語られるのではなく、現在へと続いている過去の出来事として語られるのである。これが恐らく、両作品の性格の最も大きな違いであろうと思われるが、これは、先に檀自身が、瀧井の作品には「肉体鍛治の方式」を学んだといい、「此家の性格」は「憤怒と孤独をおがみうち・に叩きつけ」たと回想したのと、きちんと対応しているのではないだろうか。つまり、瀧井は昭和五年の時点では既に「無限抱擁」の作家であり、「父の活計」にも「鍛治」という言葉にふさわしいだけの、実生活の積み重ねと対象の客観化が行われていたのである。これに対して、「此家の性格」は檀一雄二十一歳の作品である。母の出走や、父親との確執といった実生活の客観的対象化は未だ不十分であり、それが「おがみうちに叩きつけ」たという回想となったのである。だが、それがこの作品のリアリティの基となっているのもまた事実であろう。

以上のように考えると、檀が瀧井の作品にみたという「剛腹な肉感」や、檀が「おがみうちに叩きつけ」たという「憤怒や孤独」の内実も、明らかに違っていくのではないだろうか。

両作品に共通する点は、主人公が父を中心とする封建的な△家√

と対立し、葛藤しながら成長する姿を描いているという点であった。そして、それが、△安定と調和▽をもたらしている現在の「私」の視点から回想されているのが、「父の活計」であり、その対立や葛藤が尚も解決していない視点から描いているのが「此家の性格」であるといえよう。そうであるなら△家▽との対立や葛藤が、△安定と調和▽として整理されたとき、それは、「剛腹な肉感」として、「文章に置換」しえたのであり、いまだ、それらをひきずる二十一歳の檀一雄にとつて、それらは「憤怒と孤独」という言葉で表わされる生々しいものにしかすぎず、「叩きつけ」ざるを得なかったのではないだろうか。

では、一体それらは作品の内部で具体的にどのような描かれているのか。作品にそつて検討していきたい。

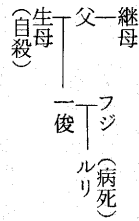
ただ、作品の検討にはいる前に、もう一つ指摘しておかねばならない事がある。それは、初めに引用した檀の回想の中に、意図的な操作が行われているということである。檀は「父の活計」を読んで、「此家の性格」を執筆するまでの時間については触れていないが、この間に、「此家の性格」の原型とでもいへべき作品を、実は執筆しているのである。昭和六年旧制福岡高等学校校友会誌に発表された「或家の断層」という作品がそれである。檀は、いつ「父の活計」を読んだかについては言及していないが、多分、檀は昭和五年の段階で「父の活計」を読み、翌年に「或家の断層」を書き、更に、それを発展させる形で、「此家の性格」を昭和八年の夏に執筆したのではないだろうか。昭和五年、檀は一年間の停学処分を受けている。理由は檀の回想と、他の証言とで若干くい違ふ点もあるが、R・S

(社会科学研究会)に檀が加入しており、その活動(同盟休校、及び反戦活動)が原因であることでは一致している。太宰や亀井勝一郎等、転向者の多い「日本浪曼派」の中でも、檀はマルクス主義に無縁であったと考えられがちである。その檀にこういう経歴があることには興味があわくが、本論では指摘するに止めておきたい。問題となるのはその停学期間中に、「ニーチェ、ショーペンハウエル、佐藤春夫、龍井孝作、小林秀雄、横光利一等を耽読^{注9}」したということである。恐らくは、この時に檀は「改造」で直接、「父の活計」を読んだのではないだろうか。社会科学研究会のメンバーであれば、当然「改造」という雑誌は必読であるだろうし、そう考えるのが自然であろう。もちろん、以上は推測の域を出ないが、以下作品内部の検討を通して確認していきたい。

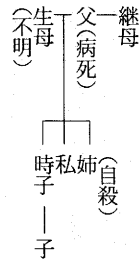
まず、「或家の断層」と「此家の性格」の基本的な関係であるが、前者は早く矢島道弘氏の指摘にもあるように、後者の主人公一俊の家出後の物語という一面を持っている。前者の冒頭は家出をしている「私」に、義母から「おん父様も、一俊はどうしとるかとかうて、此頃の病氣もそなた様のことの心配の余りかも知れぬと思はれ候から、この手紙内緒にて、自分から来たというて来て下され」という手紙が来る所から始まる。「此家の性格」の最後で主人公一俊は、「父の家の中に強烈な爆弾をしかけねばならぬと思ひ、自分の運命に息がはずむ」のを感じながら、家を出て行くのであるから、その点では、この二作品の首尾は一貫していると言える。

唯、両者の人物関係には左のような違いはある。

。「此家の性格」



。「或家の断層」



このような両作品の人物構成の違いを考慮に入れても、両作品の間に共通する点が多い。封建的家長として権力を振るう父と、それに愛憎半ばする形で対立し、その家を去る（「或家の断層」では去った）主人公という設定は特徴的である。「此家の性格」の父は、「永い不行跡で行衛を失」い、その父が「北海道からひょいと戻って来た」所から物語は始まり、「父は何も噂を知らず日益に威猛高になつて一家は父の下におびえるよう」になる。「或家の断層」の父も封建的家長としての権勢を振るい、主人公は「父の悲惨な生涯に、悲憤に似た愛を覚え」と同時に、「面と向ふと其の偏つた性格にそむいて見ずにはゐられぬ」いのである。また、両作品とも生母と別れて「此家の性格」では自殺。「或家の断層」では不明。）継母が登場する点でも共通する。その他の家族の設定の違いは先に示した図のとおりであるが、その違いも形を変えているだけであるとも考えられる。「或家の断層」の妹時子は、「此家の性格」では妻のフジに姿を変えているだけで、その本質は変わっていないとも言えよう。

だが、私は「或家の断層」を「此家の性格」に先立って書かれた一俊の後日譚として読むことには無理があると思う。なぜなら、一俊は「此家の性格」の終わりで「生活にも愛情にもにせものとはんもの」とを判つきり分ける刃をぎりぎり刺し込もうと」して、また、

「父の家に強烈な爆弾をしかけ」ようとして、「自分の運命に心をはず」ませて出奔していくのである。それが、「或家の断層」において、父の死によって帰郷し、「其の卑屈な母と、妹と、その子を負うて行かねばならぬ、暗澹たる自分自身の生涯に替えてゐる」のでは話は振出しに戻るだけのことである。そうであるならば、この二つの作品は、主人公の出奔前とその後日譚として読むよりも、「此家の性格」は「或家の断層」を原型として持ち、そのモチーフやテーマを継承、発展させた作品であるとした方がよいであろう。もちろん、その中心となるテーマは、父を中心とする（△家）との対立、葛藤ということになるであろうが、「或家の断層」では後半部にそのテーマが若干ずれているように思われる。

主人公が「チキトクスグカヘレ」という電報を受取る。急ぎ、帰郷すると父は概に死亡しており、その死顔と対面した後、次のような感慨が述べられる。

私は四畳半の障子をサツと明けて、母の、私の、そしておまへ（妹時子）引用者注）の広い額を見ようとあせつた。

私は其処にある限りの女への不満にずぶ濡れになつてゐた。両腕に生れ付いたばかりの赤ん坊を抱へ、時子は、もう卑屈な眼に、安静と同情を乞ひ、だらりと下げた帯には生活そのものを失つた哀れな女全体が揺れてゐる様だつた。

私は女そのものゝ意気地なさに歯ぐきが立ち、母が粥を運ぶと時子は満足さうにそれをながめてはすすつた。

子供を生まねばならない故に、母の愚かな采配の下にすら甘んぜねばならず、かうして無気力になつて終つて行く「女」を罵倒せずにはゐられなかつた。

このように、父が死んだ後に主人公一俊が感じているのは、最早、父への憎悪ではなく、「女」に対する憎悪である。それは先に引用した結末で、「鬼屈な母と、妹と、その子とを負うていかねばならぬ暗膽たる自分自身の生涯に脅えてゐる」主人公へとつながっている。

つまり、「或家の断層」では、端的に言つてしまふなら、そのテーマは主人公と父との確執から出発したのに、父の死によって、時子を中心とする家庭内の「女」への絶望と憎悪へとずれていっているといひ得よう。それを否定的に捉えるか、「或家」の時間の経過に伴う、テーマの展開として、肯定的に捉えるかは、ひとまず置き、「此女の性格」ではそれらはどうなっているのかを検討したい。

作品の中で主人公一俊は、「鉄道が白いブリッジの上をゴウゴウ駆けると」「無性に恐し」く「ヒイヒイ云つて泣」き、まだ寝小便をする少年から、妻子のいる青年へと成長する。少なくとも、十年以上の時間の経過を、原稿用紙四十枚程の作品の中に描き出すのであるから、どうしても、作品は大小様々な事件の羅列とならざるを得ない。そうした様々な事件は、封建的家長としての父親の権力が家族へと向けられた場合と、封建的小地主として、父親が小作を主とする社会と対立した場合とに大別できよう。そして前者は更に、一俊が少年期の場合と、成人して後の場合に分けて考えねばならないだろう。当然その年令によって主人公の対応は変わらざるを得ないからである。

父親と母親の諍いとそれに続く母の自殺が少年期の最大の事件である。父親の出走中に、母が旅役者と関係があったことが村人の告げ口から父に知れ、父は母を折檻する。

急に父の激怒した声が聞こえてきて母屋に仁王立になり母の髪

を掴んで引き廻した。母の袖がもぎれて泣き出す母の頬を、父はピンピンなぐりつけた。父の筋骨が顫えて、はては乳房を引っぱり出し母の着物を尻迄まくりあげてエイエイ折檻するようだった。仄暗い部屋の中で母の太股が残酷にふるえ、母はいぎたない叫び声をあげては逃げ廻った。こわいながらもこの両親の醜い争いは僕に不思議な興奮を湧かすのだった。

この後、父は「會祖父の槍」まで持ち出し、母は数日の後自殺する。裏山の自殺した母の所へ走る「父の荒い息が執拗に僕の耳に残」る。親達の「ねじれた零屈気の中で」「卑屈に育つていった」主人公の幼少期の中でも最大の事件であるが、それに対する主人公の反応は、「不思議な興奮」であったり、「父の荒い息」を記憶することでありたりする。このような表現は他の箇所にも多い。たとえば、父が小地主として、小作人と対立する場面でもそうである。

ドシャ降りの晩だった。門の辺りにわいわい人声がするよう
で雨戸にバタバタ石が投げつけられた。槍を殺せ、という烈しい声
が雨に混っている。父は垂木の槍をキリリとしごいて雨戸を蹴破ると何
を血迷うとるか外へ出て行った。三郎提灯を持つと父の呼ぶ声
がして、廊下に立つと提灯は雨に流れた。

真鍋呉夫は、同じこの部分を引いて「小作農民と地主の尖鋭な対立が、さながら鉈で生木をぶちきるような倍動な文体で活写されている」と評価しているが、その後主人公はやはり「私の足許にもサツとしぶきが飛んで、足腰じゅっくり濡れたことを覚えてる」のである。その他にも、小作人の妻である兼がチブスで死に、その死体が玄関の近くに置かれていた時も「兼の死に顔」が「僕の胸に永く錆ついて離れない」のであるし、また、継母と父との結婚式の夜も

「変な歌が耳に残って到遂眠れず、其の夜のトヨを駈ける兩足の音は未だに僕の耳に残っている」のである。このような表現は、一面から言えば一俊の感情を直接的に表現することを避け、先に引用したように、真鍋のいう「鉦で生木をぶちきるような枯勁な文体」と相俟って、尾崎一雄にも「瀧井さん流のところがある」と言わしめるポイントとなっているであろう。もう一つ、一俊に即して考えれば、一俊を父の行動に反発しながらも、それを行動によって父に示すのではなく、内攻させていく人間として造型していると言えよう。つまり、一俊は、成人するまで父の横暴と暴力を記憶し、忍耐する少年としてのみ造型されており、それは封建的家長制の下での少年像として、リアリティを持つものであると言い得よう。

そして一俊は「隣村一の豪家」の娘であるフジと結婚する。フジは「ちよっとした人の愛情にもひどく溺れるよう」であり、「僕の家の不思議な性格の板ばさみになって始終おどおど」し、「僕」は「そういう卑屈な精神で夫婦生活を通して行かねばならぬ思いの中で苦りき」る。父がフジの琴をとがめたのをきっかけに「僕は生活にも愛情にもにせられたものとはんものとを判つきり分ける刃をぎりぎり刺り込もうと思」う。この覚悟が、父の横暴の下でそれを見詰めたながら育って来た主人公の覚悟なのであるが、それは形を変えて、フジが妊娠したと知らされた後の「僕の生涯も、兎に角一通り小器用にまとまって終ったのだ。何よりも、自分が自分の境界に何の悔いも感じなくなってしまうというアセリで夜が寝れなかった」という表現や、「父の家の中に強烈な爆弾をしかけねばならぬ」という決意となつて表われている。しかし、果してそういう一俊の決意なり願望なりは具体的にどう実現されているのだろうか。それはわずか

に生まれた娘に父が小冬という名をつけようとするのを拒み、ルリと名付る行為によつてのみ実現されているばかりである。しかもそのルリですら一俊の両親の溺愛がもとで疫痢で死なせてしまうのである。そしてそれを契機に一俊は旅出つ。では、旅出つて行く一俊は果して「にせものとはんものとを判つきり分ける刃をぎりぎり刺し込」んだと言えるのだろうか。「父の家に強烈な爆弾をしかけ」たと言えるだろうか。答えはもちろん否であろう。これは何を意味するのであろうか。

そもそも、先に述べたように、「此家の性格」は檀が「己のこの奇ッ怪な憤怒と孤独をおがみうちに叩きつけ」たと回想する作品であった。しかも、その「憤怒と孤独」の内実とは、檀本人の幼少期の体験に基づく父を中心とする「家」の対立葛藤であった。それは、「或家の断層」では微妙なズレを見せていたが「此家の性格」では終始一貫して、テーマとして流れていた。だが、主人公の一俊の少年期の造型には成功しながら、その「家」を乗り越えてゆくべき青年期の造型に失敗しているということは、檀一雄本人が、「家」を乗り越えるべき論理を未だ獲得していないということを意味するのではないだろうか。一俊の誕生日が年越しの日なのは偶然ではない。この日は檀一雄自身の誕生日である。

「或家の断層」から「此家の性格」へと作品は確かに深化している。前者には先程も述べたようにテーマのズレともいえるものがあったし、習作の域を出ない表現も多かった。何よりも「家」の問題は檀本人にとって切実な問題でありながら、主人公は、「暗膽たる自分自身の生涯に脅えてゐる」ばかりで、何ら、その問題を解決する方向性を示しえなかった。ところが、「此家の性格」ではそういう

ズレもなくなり、テーマは終始、父を中心とする〈家〉の問題に絞られ、前半部の一俊の造型にも成功している。これは明らかに作品内容の深化とよんでよい。ところが、幼少期から檀一雄本人が悩み続けてきた〈家〉との葛藤を仮託した主人公一俊は、その問題を論理的に解決する方向へ向かうのではなく、作品の中で、一俊自身が宣言したように「父の家に」「爆弾」も「しかけ」られず「刃」をも「刺し込」めないものである。それは明らかに一俊の敗北であろう。

そしてそれは檀一雄が意図した結果であるというよりも、檀一雄自身に未だ〈家〉を乗り越え、相対化するだけの論理、言い換えれば瀧井流の「内感を文章に置換する肉体鍛冶の方式」が獲得されていないが為の必然的な〈敗北〉だったのではないだろうか。「憤怒と孤独を叩きつけ」るようにして、一俊という自分の半身を造型することはできた。だが、この時の檀に、その一俊の行動を通じて〈家〉の問題を解決の方途を探ることは未だ不可能だったのである。そしてそれは『花筐』所収の「美しき魂の告白」や「夕張胡亭景観」でも試みられているが、もはや紙幅は尽きた。他日を期したい。

注

- 注1 「不思議なデビュー」初出不詳
注2 たとえば戦後ではあるが、「僕は屈託なく己の肉感に即いて、自他判別の拠点とする」（一人で金槌を持つてする）「思潮」二十五年五月号）とか「おのれの肉感を文章に表現するという操年は、実に非常に緩慢で厄介な事業なのである」（『文士十年説』「新潮」三十五年四月号）である。

注3 「火宅の母の記」によれば、恋愛は出奔の後で、直接の原因ではない

というが、檀自身は『わが青春の秘密』（昭和五十一年四月、新潮社）等で、こう信じていたと述べている。

注4 『日本文学全集 坂口安吾 井上友一郎 檀一雄集』（昭和四十五年十一月、筑摩書房）所収。

注5 「母」（『新潮』昭和三十年一月号）

注6 「じじばばの花」（『えきすぶれず日本通運』昭和三十九年四月十四日号）

注7 「わが青春の秘密」

注8 檀は「自筆年譜」等で同盟休校の首謀者の一人であったというが、「人間檀一雄」（野原一夫・「正論」昭和五十八年十一月号）「六十年八月号」、同十月新潮社より刊行）によれば、同盟休校の時は停学ですんだという。

注9 『人物書誌大系？檀一雄』（石川弘編、一九八二年五月、日外アソシエーツ）

注10 「檀一雄覚え書——「此家の性格」までを中心に——」（『文学年誌』5号昭和五十五年七月）

注11 「『此家の性格』について」（『檀一雄全集第1巻』（一九七七年九月、新潮社）

注12 「なめくち横丁」（『群像』昭和二十四年九月号）

檀一雄本文は新潮社版全集によった。但し、「或家の断層」は未収録の為、「ポリタイア檀一雄特集号」（昭和五十一年五月、白川書院）所収本文による。瀧井本文は初出。但しルビははぶいた。